
(令和5年11月23日掲載)

子どもの表現受け止めて



土居 寿美子 (どい・すみこ)

地域子育て支援センター「いるかひろば」理事長。1961年梶原町生まれ。近畿大学豊岡女子短期大学卒。1999年から保育士。2007年から高知南福社会運営の地域子育て支援センター「いるかひろば」(保育園併設)の仕事に従事。2019年、有志とともに特定非営利活動法人いるかひろばを立ち上げ、理事長に。高知南福社会から事業を引き継ぎ現在に至る。

「地域子育て支援センター」をご存じでしょうか。主に就学前の親子が利用できる無料の施設で、親子の交流や相談、育児に関する情報提供、育児講座などが行われています。私は高知市で地域子育て支援センター「いるかひろば」を運営しています。

いるかひろばには毎日さまざまな親子が遊びに来てくれます。中には子どもが「泣く」「怒る」「やけになる」などで悩まれている保護者もいます。

「子どもの人権」を考える時、私はいるかひろばで出会うお子さんたちを考えます。「人権」とは「人間が人間らしく生きる権利で、生まれながらに全ての人を持っている権利」を言います。堅苦しい言葉と思われる方もいるかもしれませんね。よろしければ一緒に考えてみませんか。

私には息子が2人います。長男はよく泣く子どもでした。俗に言う「背中スイッチ」があり、布団に寝かせるとすぐに泣いて起きます。家にいる時はずっと抱っこで過ごしていました。当時の私は寝不足でも、「子どもはこんなものだ」と思っていました。

ところが、次男を出産し、気持ちに変化が…。次男は長男と違い、そんなに泣かず、日中もベッドで寝ました。「寝る」ということ一つでもわが子でこんなに違いがあるのかと気づきました。

長男は次男に比べると、自分の思いを言葉で表現したり、人前で何かをしたりするのが苦手でした。保育園では「あれができない」「これもできない」と報告を受けた記憶が残っています。

今、冷静に思えば、寝ないことも、表現が苦手なことも、長男の「個性」なのです。でも、子育て真っ最中の頃は子どもが泣いたり、怒ったりするたびに、ストレスをためていま

した。成長と共に個性を変化させていったわが子たちのおかげで、子どもの個性の違いを理解して、関わる大切さに気づかされました。

いるかひろばでは、子どもたちがさまざまな姿を見せてくれます。泣く、怒る、わめく、固まる…。大人の言う通りに行動するいわゆるいい子もいます。

子どもの喜怒哀楽の表現の仕方には、個性があります。中でも、私が大事にしているのが困っている時の表現です。

「泣く」「怒る」という子どもの行為は、大人にはネガティブに受け取られがちです。「泣いたらいかん」「怒ったらいかん」という声掛けもよく耳にしますが、私は困っていることを「困っている」と表現しているのではと考えています。

幼児期は表現の仕方が上手ではなく、言葉でうまく説明できません。そんな時はまず、子どもの「泣く」「怒る」という表現を否定せず、受け止めます。そして、子どもが何を訴えようとしているのかを考えます。「ママがトイレに行ったから不安なのかな」「お友達が持っているおもちゃが欲しいのかな？」など、状況から子どもの思いを代弁しています。

子どもの表現から「困っている」を受け止める。そして、子どもの思いを「代弁」する。「何だ、それだけ？」と、ささいな行為のように思えるかもしれませんが、日常生活で受け止めと代弁を繰り返していくことが、子どもの人権を大事にしていくことにつながっていくように思います。

自分が困っていることを「困っている」と伝えられることは、「生きていく力」にもなると思います。大人になっても大切な力です。

子育てで何か困っていることがあれば、一人で抱え込まず、誰かに相談してくださいね。それが子どもを守り、あなたを守ることににもなるのではと思います。

あなたは、決して一人ではありません。



いるかひろばで子どもを抱っこする筆者（高知市六泉寺町）